

シブイってなに？

湯浅 叡子

いまほど、国際化、国際理解、国際交流、と、国際、という言葉がひんぱんに使われることは、かつてなかった。したがって私の所へも、国際理解について書いてほしいとか、しゃべってほしいという依頼がよくある。その理由は、私の経歴にあるらしい。一見、国際風だからである。というの、私は大学を出て以来、ずいぶん職をかえている。終身雇用で、いったん入社したら一生その会社に忠誠を誓うというのが、日本人の伝統的職業観である。そういう意味で、私は日本人的ではない。むしろ、アメリカ人的といえる。移りかわった職業が、国際、という名称のつくのが多

かったことによって、私を国際人だとする美しき誤解が生れたらしい。

私が『ハウスビューティフル』誌の記者として招かれ、四年間、ニューヨークで仕事をすることになったのは、偶然がもたらした大きな原因があった。その頃私は、京都市観光局で国際観光担当をしていた。観光資源でおおいにドルを稼ぎましようという時代であったから、京都市としても、国際観光には力が入っていた。私の役割といえば、その頃ブームであった日本、特に京都へ取材に来るマスコミ、映画、学者の相談のり、便宣をはかったり紹介の労をとったりというものであった。異国情緒、

異文化を強調したいという視点が多かったが、新聞、雑誌、テレビ、ハリウッド映画などの取材があいついだ。相手変って主変らずだわ、などとボヤキながらも、日本人の名誉のためにも、などと結構張り切ってやっていた。

その日は五月の薫風が快よい連休の日であった。ニューヨークから『ハウスビューティフル』誌の編集長以下、カメラマンなど、一行十名が京都に来ていた。取材打合せのために、私は東山の旅館へ訪ねたのだった。編集長は女性であった。しかも抜けるように色の白い、小さな顔にコバルトブルーの瞳が輝きたいへんな美人であった。働く女性が、まるで映画女優のように優雅に装ったその美しさに、私は魅せられてしまった。けれど、そのやさしい美しさとはうらはらに、彼女の質問は鋭く、無駄のない本筋をつくものであった。

同誌は生活の質について探求しつづけており、博物館で陳列されるような文化財ではなく、日常生活の中で日本人が美しいと考えているものを知りたいということであった。それならば、と私はおきまりの社寺

仏閣を避けて、日本人が生活の中で使っているものをお見せしようと、T百貨店へ連れていった。

先ず風呂敷売場へ。日本の伝統的な柄、色彩、パターンの配置などが、クイックレファレンスできるからである。次に、きもの、陶器、漆器と順番に売場をまわっていた。その時、編集長が「しぶい」って何なの」と質問した。「これ、ちよつと派手ね」とか「もう少し地味なの見せて」などと、店員さんと話していたのを耳にはさんだからである。編集長は、「どの売場でも『ハデ』『シミ』『イキ』『ヤボ』などの言葉が使われていたが、『シブイ』といった時に示された物に一番興味のある美しさを感じた。」というのである。また「美学を専攻した研究者ではない、いわばごくあたりまえの若い女性が、ひとことの表現で、美の性格を的確に捉えるということは、西洋社会ではあり得ないことだ。」と、とても驚いたのである。

さあ、それからが大変。「シブイとは何ぞや」という命題をかかえて、書物をあさり、禅や美学の大家の方々にお目にかか

り、渋い」を解明するために大奮闘したのだった。けれど、美学の本には、カントやヘーゲルばかりが出てきて、日本の美の性格については一行もふれていないし、インタビューした方々にも、日本の美意識について、論理的、体系的に語れる人は見出せなかった。思っていたよりもずっと「しぶい」は理屈ぬきの感覚であった。これを異文化の中で育ったアメリカ人に、いかにして説明するか、至難のわざであることを思い知らされた。と同時に、高い教養をもつ日本人でも、自らの文化について、他にわからせるほど客観的に把握できていないことに、愕然としたのである。

『ハウスビューティフル』誌は、その後三度の来日をし、一年がかりで研究をして『シブイ特集』を刊行した。これは同社はじまって以来の大ヒットとなり、一週間で売切れてしまったほどであった。まだまだフジヤマ、ゲイシャが日本のシンボルのように考えられていた頃のことである。いままです全然知られていなかった日本の深遠な美は、アメリカのインテリア、住宅関係者に大きなカルチュラル・ショックを与えた

のである。

この『シブイ特集』は偶然の所産である。編集長が、非常にシャープな感受性をもった人であったから、私のしゃべる日本語から、「シブイ」をキャッチしたのである。私のほうから、渋いがいかに魅力である美であるかを積極的に訴えかけたわけではない。むしろ、彼女の強引ともいえる探求心に押されっぱなしであった。このころが、私にとっていまだに後めたく、はつきしく思う点である。当時の私にとって、渋いとか粹とかいったことは極くあたりまえの常識にすぎなくて、それがアメリカ社会でそんなに評価されるなどとは、想像だにしなかったのである。

彼女は『シブイ特集』に大きな喜びと誇りを持っている一方、これだけの高い美的基準を持っていながら、日本人は誰一人として教えてくれなかったと怒るのである。日本料理についても同様の怒りを持った。「あたかも、すきやきと天ぷらしかないような言い方を日本人はするが、日本の料亭の懷石料理は、フランス料理に勝ると劣らないものであるし、更に芸術とまでいえる

ほど美しい。こんな秀れたものを、外国人から隠しているのは、フェアーではない。」とこんな調子で怒るのである。

日本人は鹿鳴館にみられるように、西欧文化に対しては、積極的にこれを取り入れて、見事に西洋化を成しとげた。しかし、自らを他民族へ説明したり、自国文化を知らせることについては、まったく苦手であるし、臆病である。西欧を師と仰いできた伝統から、西欧文化だけが世界で普遍性をもったものだときめこんでおり、日本文化は特殊であるから、到底異邦人にはわからぬ確信しているようである。経済大国にまで発展した今日、そろそろ鹿鳴館精神から脱却して、西洋一辺倒ではなく、さりとて、唯我独尊でもなく、相対的に多種多様な文化について認識を深め、自らの文化についても、気負わずいじげず、爽やかに語れるようになりたいものである。

昭和二十五年大学文学部英文科卒業。
(財団法人 民族学振興会千里事務局長)

同志社校地出土の埋蔵文化財

鈴木 重治



亀形座鈕双鶴南天文蓬葉鏡
(室町時代、田辺 Loc. 3 出土)

同志社の田辺校地には、弥生時代の竪穴住居址群が発見された「田辺天神山遺跡」をはじめ、横穴式石室を残す「下司古墳群」などこれまでに十六ヶ所の遺跡が確認されている。

ここに示す和鏡は、田辺校地第三地点遺跡の中世城館の土塁中から、一九八〇年二

月二十九日に出土したものである。

径五・一釐を測る鏡面には、緑灰色の錆がひろがり、部分的に木炭の細片が付着している。鏡背の文様は、中央の鈕に上向きの亀を置き、左右対称に配された二羽の鶴が、その上部で首を屈曲させて向い合い、翼をひろげて足を伸ばし、空中に舞いながらともに嘴を亀の口に接して、均整のとれた上半部の文様を構成している。下半部にみられる草文は、風になびく南天をうかがわせ、左右に振り分けられた細い茎態を示している。亀甲や鶴の羽根、南天の葉脈などの細部文様にいたるまで、鑄上りは良好であって、小型の亀形座鈕双鶴文蓬葉鏡の出土品として稀有の例である。

この銅鏡に伴って出土した資料には、菊花の印花文を体部外面にめぐらせた素焼の香炉や土師皿、中国製の青磁、白磁、青花などの碗、皿があり、すべて室町時代に属している。

なお、これらの考古学的にも重要な一括資料は、同志社資料館収蔵庫で保管されている。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)

マドリー日本人学校

大 島 正

昨年三月十七日スペインに向って伊丹空港を飛び立ってから今年三月二十四日帰国するまでの丸一ヶ年のスペイン留学中の研究課題の一つに海外における日本人の意識の問題があった。これは留学以前にはあまり考えなかったのだが、マドリーで生活するうちに意識にのぼってきたものである。留学体験は比較文学研究の上では、重要な問題であるから、自ずと頭に浮かんできたのである。それとは別に派生的に海外における日本人の子弟の言語教育と言語感覚という問題に特別に興味を湧いてきた。

マドリーといわず、欧米各国に在住する日本人は大別すると、①大使館などの公館

員及び商社員②その土地に永住している者に分類できるであろう。③の場合は子供を持つ者がいないから問題外である。だが、①と②では深刻な問題が^{しやうたい}出来る。中南米のある国からマドリーの日本大使館へ転勤してきた書記官の話には考えさせられるものがあつた。その国には日本人学校がなかったため、日本語はもちろんのこと理数科などの諸学科まで、教科書を日本から取り寄せ大使館退出後家庭ですべて教えたという。男の子二人は学年が違うので個別に教えるのは大へんであつたらしい。外交官とは因果なショウバイだと、つくづく思った

が、幸いマドリーには日本人学校があるので大助かりだというのである。私はこの話を聞いて思わずうーんと唸ってしまった。ところで、マドリーに日本人学校ができたのは昨年九月十八日であつた。発足当時は小学校六年生、中学校三年生。小学生四十四名、中学生七名であつた。

私に苦心談を話した書記官の二人の男の子もやっと学校らしい学校で正規の日本語による教育を受けられるようになったわけである。

この学校は元はマドリー日本語補習校として一九七三年二月二十四日に発足したもので、現在の日本大使館 (Calle Joaquín Costa 20) に近いスペイン人学校マリア・ビルヘン校 (高校) の一部を借りていた。発足当時の生徒は僅か二十五名であつた。それから六年後、大手商社の社員の集りである水曜会を中心にした在留邦人の間に日本人学校開設の気運が高まり、学校設立準備委員会が発足。三井物産の白川澄嘉氏が初代委員長に選ばれた。その後紆余曲折を経て二年後の昨年九月に正式に発足したわけである。初代校長は浜田俊雄氏で、同時

に発足した、マドリー日本人学校運営委員の委員長には第一勧銀の小山昌二氏が就任した。小学部から中学部までの教職員は十三名（教員数十一名事務職員と用務員各一名）で小数学童の学級を教えている。因にその数を書くところのようである。

小学一年（12）、二年（8）、三年（3）、四年（7）、五年（8）、六年（6）、中学一年（5）、二年（1）、三年（1）。男女別でみると男子（24）女子（27）となっている。

これで判るように昔の寺小屋のような学級であるから、日本国内の学級に較べると教師と学童の間の接触は甚だ密である。教科はすべて日本の文部省の規定に従っているが、小学一年からスペイン語が正科となっている。これはスペイン政府の意向にそうものであり、当然の措置であろう。マドリー大学出身のスペイン人講師がスペイン語の教授にあたっている。日本人学童は大きい家に戻ると、近所のスペイン人の子供と友だちになっていろいろ遊びをするし、互いに家庭訪問もするので、そこでは自ずとスペイン語が話される。

子供のころから母国語と一つまたは二つ以上の外国語を話す場合は単に母国語だけを話すとは異なり、意外に負担を背負うことになるものだ。英語では Bilingualスペイン語では Bilingüe いわゆる「両国語使い」は完全なたちではあり得ない。スペイン人がイタリア語、ポルトガル語を話すのは比較的容易だが、日本人が系統の全く違うヨーロッパ語を話す場合はまるで違う話になってくる。

空海のような天才ならいざ知らず、並の人の子が言語の負担を二重に背負うのは誠に不幸と言わねばなるまい。ただし、いわゆる国際感覚を早くから身につけるといふ意義はあるのだが、日本内地でこのような負担を感ぜずに、学習塾などで受験術を身につけていく学童と海外の学校で学ぶ子供とはこういう技術に差がつくのは当然と言わねばなるまい。

昨年六月十三日まだ日本語補習学校と称していた日本人学童の運動会がマリア・ビルヘン校の校庭で行われていた。私はそこへ出かけて幾枚かの写真を撮ったが、いろいろな光景を目撃した。日西混血の子供は

日本語がほとんどできない。日本人の父親ともスペイン語でしか話せない。また両親が日本人であっても永住して商売をしている家の子は日本人の子とほとんど遊ばないので、これも日本語ができない。親が日本



’81（昭和56年）6. 13（土）マリア・ビルヘン校々庭にて日本人学校の運動会

語で話しかけると。子供はスペイン語で答える。いずれも子供が成長した時には親子の対話が困難になるだろうという、親たちの話には深刻なものが感じられた。

この種の言語の問題は永住者のみではない。五年、六年と比較的永くマドリーに住まねばならぬ商社員などの子弟にも同じ問題が起きてくるらしい。日本人学校に通学できるようになってからは以前のような深刻な悩みは序々に解決されるにしても、完全とはいかない。

楽しそうに運動会ではしゃいでいる子供たちの姿の背後には日本内地にいる時には想像もつかなかった苦悩があることを知らされた。

ところで、このような負い目をもって帰国してくるこれらの生徒に対して、日本国内の対応は極めて冷淡である。主として言語に負担を感じながら教育を受けてきた子供供たちに、日本国内で普通に教育を受けてきた子供供たちに対するのと同じ要求をするのは無理であろう。

実をいうと同志社国際高等学校が設立されたときには、私は全く無関心であった。

しかし、在留邦人からこの高校のことを聞かれたとき、答えないわけにはいかなかった。また彼らは帰国後の子供の進学について極めて熱心で、関係書籍を取りよせ、私よりもよく知っていた。

同志社大学の教職員がおおむね冷淡であった国際高校も、海外で働いている商社員や公館員にとっては数少ない頼みの綱の一本であるのだ。私はすっかり考えこんでしまった。彼らの子弟に対する国内の受け入れ体制が十分でないと、日本人の海外勤務者は次第に意欲を失っていくかもしれない。なんでもないようなことがまことに意外な方向に展開していくものである。

このように考えていくと海外からの帰国子弟の教育に冷淡ではおれなくなる。私はここで、これらの特殊な事情にある生徒に対する教育論を大々的に論じようという大それたことをしようとは思わない。よしんばやろうにも限られた紙数ではできないのである。だが、言語教育の問題だけは、それが最も基本的な問題だけにいささか所信を述べておきたい。ややもすれば帰国前に生徒が覚えた外国語をそのまま持続

させようとするのはよくある考え方である。一見もつとらしくみえるのだが、安易な実用主義から出発してみるとみている場合が多いようである。国際的という意味は、いくつかの外国語が話せることとは必ずしも一致しない。

むしろこのような安易な実用主義は排すべきであろう。そんな外国語なんぞ完全に忘れるほど正しい日本語の「読み」「書き」「話す」力をその外国語を通じてつけてやるべきである。これが海外からの帰国子弟に対する重要な教育であろう。マドリー日本人学校の教師の一人は私にこう言っていた。「この学校の子が帰国した際に平均的に考えられるのは日本語の弱さであろう。それを受け入れ側は軽蔑しないで辛抱強く教えこんでほしい」と。

この意見は極めて常識的にみえるが、その通りに実行するとなれば中々難しいのである。私は同志社国際高校でどんな教育が行われているかはよく知らない。しかし一年間の海外研修の結果、その存在の重要性を痛感したから、言わずもがなのことをお世っかいにも書いてしまったわけである。

そろそろ国際高校出身者が一海外からの帰国子弟一同志社大学へ入学してくるであろう。彼らの日本語はおかしいなどと評判がたつてはおしまいである。

もしそうであっても、一方的に非難するのではなく、国際高校側に帰国子弟の教育について建設的な意見を具申してやるだけの度量を大学側はもたねばならぬであろう。また、高校側も謙虚に耳を傾けるべきである。

話は前後するが、年少のとき覚えた外国語は一旦忘れても必要があれば、後年再び勉強すればすぐに復元するものなのである。欧米諸国でや々と覚えたヨーロッパ語を忘れてはならぬなどとあまり近視眼的に考えないことだ。

さらに言語というものはいかなる言語を基礎にするかが問題で、日本人は日本語を基礎にして外国語を解する。年少にして外国語を頭に入れると往々にして母国語も外国語も曖昧になることを忘れてはならぬ。

(大学商学部教授)

『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)

第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

後半期

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直藏総長は「通史編」の「序」

で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹の権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展

開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつたものである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になっていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇〇円

送料不要の場合 五四〇〇円

「資料編」約二〇〇〇ページ。

頒価・一二〇〇〇円送料不用の場合

一〇八〇〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課

(書〇七五―二五一―三〇三八)

茶 白

コーヒー通と茶人

コーヒー豆を信用のおける店で吟味して
買い、自分の好みに合わせて炒り、ブレン
ドし、それを手挽きの豪華なコーヒーミル
で、好みの粒度に挽く。これがコーヒー通
である。コーヒー店の店先には、看板にク
ラシクミルがおかれ、店内にも、様々
なミルが並べてあるのがふつうである。

ところが、茶の湯となると、事情は全く
ちがっている。お抹茶は缶入りのを買う。
三〇グラムか四〇グラム入ったのが、四〇
〇円、八〇〇円、一六〇〇円、三〇〇〇円
などと、ピンからキリまである。美しい缶

三輪茂雄

には「松風」だの「玉光」などと、すばら
しい銘が書かれているが、お茶屋さんによ
って、まちまちで、内容は全くわからない。
い。コーヒーではブルーマウンテン、モ
カ、キリマンジェロなどと、一応の目安が
つくのに比べると。抹茶の場合はすべて当
店自慢のブレンドであって、見当もつか
ない。値段が高いほどいいお抹茶だろうと思
うしかない。

いっぽう茶の湯には、裏だの表だのと、
権威ある流派があつて、抹茶を点（た）てるとこ
ろから先は、滅法うるさい。表は余り泡立
てないのにたいし、裏は泡を大切にす。
香と味がどこに分散するかの見解に相違が

あるらしい。茶筌を吟味するのはわかると
しても、茶わんに万金を投ずるのはなぜな
のか、これも解せないところである。抹茶
の吟味、つまり茶の味と香りをそっちのけ
にして、茶わんの、それも内面ではなく、
外側を眺めて嘆息している風景は、不思議
というほかはない。ここに瀬戸物屋の商魂
が割りこんでいると思うか、それとも
芸術と解するか、それは勝手だが。

茶臼は、その昔、宝物だった

コーヒー豆なら誰でも知っているが、お
抹茶の原料となる「碾茶（せんちゃ）」を見たことがな
い人は意外に多い。茶の湯のお師匠さんの
中にも、そういう人がいる。「玉露を微粉
末にしたものが抹茶じゃないんですか」と
いう人もいる。覆いを被（か）せて柔かく育てた
茶の新芽を摘んで、これを蒸し、揉んでか
ら乾燥させたものが玉露であるが、碾茶は
揉む工程が省略されている。ひじょうに丁
寧に乾燥したものを荒くだし、茎の部分
を除去したものが碾茶である。この碾茶
を、茶臼という独特の石臼で微粉末にした
ものが抹茶で、コーヒー豆に相当するのが

碾茶、コーヒーマルに相当するのが茶臼である。

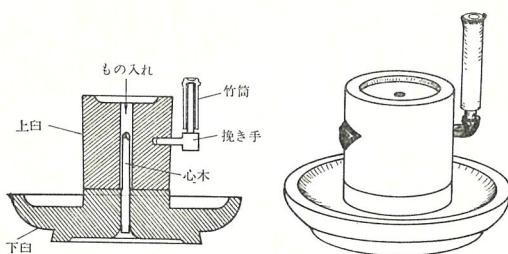


図1 茶 臼

唐代の中国で抹茶が出現した頃は、茶碾という道具で粉末にした。木製、金属(銀)あるいは陶製の薬研である。その十一世紀頃になって宋代の中国でもっと優れた道具として発明されたのが茶臼であった。

石臼といえは、きなかや、香煎を挽く、

粉挽き臼を想起するが、茶臼はその精巧さにおいても、またその外観の美しさにおいても、格段にすぐれたものであった。超上流階級が手間ひま構わずつくらせる宝物的道具だったのである。私が茶臼の話をしているとき、いつも何人かの人達は、戦中、戦後に代用食をつくった粉挽き石臼を想起しておられる。だがそれとこれとは月とスッポン。貴族と百姓ほどのちがいががある。

『お伽草子』には「松風」の茶臼という宝物をめぐって恵比須様と大黒様が対立し、布袋和尚の仲介で、やっと京都を戦場とする死闘が避けられる話が出てくる。上等の茶臼で茶を挽くときには、松風のような音が出る。この話と直接つながりがあるわけではないが、松風の茶臼は現存し、私はそのひとつに、岡山市内の某家でお目にかかったことがある。宝物の風格充分で、漆ぬり、挽手部には見事な蓮弁の彫刻が施され「松風」という文字が浮彫りされていた。もうひとつの松風の茶臼は十年程前まで京都にあり、京都新聞でも紹介されたところがあるが、そのご芦屋方面へ売られ、行方不明という。この幻の松風の茶臼を熱心

に追いつづけている研究者もいる。

茶臼の歴史

松風の茶臼は唐物で「唐茶磨」に属する。宋から日本へ伝えられたのはいつか？ まったく不明だが、鎌倉末期には夢窓国師や、虎関師練というような京都五山の高僧たちの間で使われていたことは確かで、記録もあるし、実物も残っている。それ以降、南北朝、室町時代を経て桃山時代に至る三百年間、茶の湯の普及にともない、茶臼が国産化されるようになった。当時、一条京極の祇陀院という寺の門前に、優秀な茶臼師がいたので、茶臼のことを「ギダイ」あるいは「ギダリン」と呼んだことも古い文書にたびたび出てくる。

茶の湯が超上流階級から、高級武士や町人階級へと普及するきっかけは、織田信長や、豊臣秀吉によって開かれた。成上り者のイメージを拭い去り、上流社会に仲間入りするためには、茶の湯が是非とも必要であった。信長や秀吉は権力にものをいわせて、名器狩りで道具を集めたが、下級武士たちは名器を模してつくらせた。全国各地



図2 松風の茶臼（側面は蓮弁）

の城跡や館跡から戦火に焼けただれた茶臼片が発見されるのは、当時の茶の湯の隆盛を物語っている。驚いたことに、どうしてこんな山間僻地に茶臼がと思うこともしば

しばである。当時の茶の湯ブームは想像以上のものだったらしい。現代におけるゴルフ熱と、なにか共通したところがある。

名器の模倣の模倣を繰り返してゆくうちに、次第に形がくずれ、とうてい茶が挽けそうもないものも見つかるのは面白い。

江戸時代に入ると町人の間にも茶の湯というお大層趣味がひろがったが、この頃、茶臼がもてない人々のために、茶を挽いて売る「挽茶屋」が出現した。抹茶の商品化のはじまりである。茶の湯道具から茶臼を除外できたことは、茶の湯の普及に大いに役立った。他の道具類はいずれも大量生産が可能だが、茶臼だけはそれができない。

当時の石材加工技術では大変な手間ひまを要し、おそらく、ものすごく高価な品物だったと思われる。コーヒーなら木製の臼と杵でも十分間に合うし、手挽きの安価なミルもつくれるが、抹茶のような微粉砕は容易ではない。その状況は現代にもつついて

抹茶と菓子

総合科目「日本の自然と生活文化」を受講している学生たちのなかから有志を集めて、私の研究室で茶会をやった。私がつくった茶臼で、めいめい自分の分だけ抹茶を挽いて、茶わんも、石英ガラス製の名器をつかう。「ところで先生、お菓子がありませんね」とある学生がいった。抹茶にはお菓子が出るのが通念になっているのだ。そこで私はいう。「この抹茶はね、強烈に甘い菓子で味覚を傷めつけておかなければ飲めないほど、まずい抹茶じゃないんだよ、

君たちは苦い抹茶しか知らないんだ。とにかく飲んでごらん」。すると「なるほど、こんなうまいものだとは知らなかった。いつまでも、口のなかでずっとしておきたい味ですね」という。「抹茶がまずいから菓子屋が繁昌するのかな」という学生もいた。私もその通りだと思う。私が調べた限りでは四〇グラム二〇〇〇円以上でないと、抹茶に添加物が入る。（天の虫がつくる葉緑素だ）。

挽きたての抹茶ならよいというものでもない。東京・新宿の地下食料品売場では、挽きたての抹茶を四〇グラム、八〇〇円で

売っている。結構な碾茶を挽いているのにこの値段は安いので参考のため買ってみた。なんと、苦いのなんの、言語に絶する味。それに、地下街の人煙のあらゆる臭気を吸収しているから、それはそれは何ともいえぬ風味だった。宇治の抹茶工場では女性の客を嫌う。化粧品が抹茶を台なしにする。地下街となればなおさらだ。

精進潔斎して茶臼を挽いたとしても、臼の研ぎ方により、また挽き方により、味も香も変る。千変万化、これがほんとうの抹茶の味である。だがそんな楽しみ方ができるのは、鎌倉時代では五山の高僧だったし、現在では、何と、私ひとりになってしまった。これではいかにも申し訳ない思いがするので、本年のイブ祭初日には、F館西で「無表裏千家流」の大茶の湯の会を催す予定である。有志の方は是非おでかけ願いたいがそこで抹茶の味を知ったら、二度と缶入りのインスタント抹茶など口にできなくなるから、念のため付言しておく。

(大学工学部教授)

新島襄関係文献(抄)

- | | |
|--------------------------------------|------------|
| LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NESIMA | 同志社大学出版部 |
| 「同志社設立の始末 同志社大学設立の旨意―口語改記並原文―」 | 同志社 |
| 森中章光編「新島先生書簡集」正・続 | 同志社 |
| 同志社編「新島襄書簡集」―岩波文庫 | 岩波書店 |
| J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」 | 小学館 |
| 「新島先生記念集」 | 同志社校友会 |
| 「明治文学全集 第四六巻―新島・植村・清沢・綱島集―」 | 筑摩書房 |
| J・D・DAVIS "JOSEPH HARDY NESIMA" | 同志社 |
| 森中章光著「新島襄片鱗集」 | 丁字屋書店 |
| 森中章光著「新島先生と徳富蘇峰」 | 同志社 |
| 森中章光著「新島襄先生詳年譜」 | 同志社・同志社校友会 |
| 永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」 | 同志社大学出版部 |
| 徳富蘇峰著「新島襄先生」 | 同志社大学出版部 |
| 魚木忠一著「新島襄―人と思想」 | 同志社大学出版部 |
| 岡本清一著「新島襄」 | 同志社大学出版部 |
| 渡辺実著「新島襄」 | 吉川弘文館 |
| 同志社社史史料編纂所編 | |
| 同志社百年史(通史編Ⅰ・Ⅱ) | 同志社 |
| 同志社百年史(資料編Ⅰ・Ⅱ) | 同志社 |
| 和田洋一著「新島襄」 | 日本基督教団出版局 |
| 雑誌「新島研究」 | 同志社新島研究会 |